

研究・調査報告書

報告書番号	担当
512	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名（原題／訳）	
Radioprotective effect of moderate wine consumption in patients with breast carcinoma. 乳がん患者の中等度量ワイン摂取による放射線防護効果	
執筆者	
Morganti AG, Digesu C, Panunzi S, De Gaetano A, Macchia G, Deodato F, Cece MG, Cirocco M, Di Castelnuovo A, Iacoviello L, Valentini V, Cellini N, de Gaetano G.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Int J Radiat Oncol Biol Phys. 74(5):1501-1505 (2009)	
キーワード	
ワイン、放射線防護効果、放射線療法	
要 旨	
<p>目的： 放射線防護剤として使用されるアミホスチンはその高費用や有害作用が問題であり、より安価で毒性が低く、同等の効果を持った物質が求められている。この研究では、乳がん患者での放射線による皮膚毒性に対するワインの放射線防護効果を検討した。</p> <p>方法： 処置前に患者の病歴と習慣を査定した。患者は対照群（標準 60 グレイ照射）、変調加速放射線療法-1（同時追加照射法）44 グレイ、変調加速放射線療法-2（同時追加照射法）60 グレイの 3 群に分けられた。皮膚急性毒性は以下の変量で評価した；放射線治療プロトコール、計画標的体積（PTV）、併存症（高血圧や糖尿病など）、治療前のヘモグロビンレベル、補助ホルモン療法、補助化学療法、喫煙習慣、飲酒習慣。</p> <p>結果： 被験者は 348 名であった。著しい皮膚毒性が関連していたのは放射線治療プロトコール（$p < 0.001$）と中等度の PTV（$p = 0.005$）であった。さらに、グレード 2 以上の急性毒性の発生率はアルコール摂取していない患者で高かった（$p = 0.021$）。また、アルコール 1 日摂取量も皮膚毒性の発生率に影響し、ワインを摂取していない患者での発生率は 38.4%、1 日グラス半分量のワインを摂取している患者で 31.8%、グラス 1 杯摂取している患者で 13.6%、1 日グラス 2 杯摂取している患者で 35.0%であった。多変量解析の結果は、ワイン摂取、PTV、放射線療法プロトコールは急性毒性に有意に相関していることを示した。</p> <p>結論： この研究結果から、ワインは放射線防護効果を有していると考えられる。今後、ワインやその成分の有効な効果を確認するために、(疫学的) 前向き研究が必要である。</p>	